

「苦難の日に」

(マルコ13:1-13)

挽地茂男

2019.5.12 日本基督教団千歳丘教会

先週はマルコによる福音書の第2論争物語集の最後のエピソードを読みました。今日はその続きの12章38-40節の「律法学者批判」、41-44節の「やもめの献金」へと話を進めていくところですが、これらの箇所は今年の10月にすでにお話させて頂いており、ホームページにも文書の形で掲載されておりますので、今回は割愛させて頂きたくことにいたしました。本日のマルコによる福音書13章の冒頭の部分も一昨年の11月にお話ししておりますので、割愛しようと考えたのですが、こちらはホームページに掲載がありませんので、ホームページの記載内容に連続性を持たせるために、お話しさせて頂きたくことに致しました。今日は13章1-4節を読みたいと思います。

このマルコによる福音書13章は「小黙示録」と呼ばれています。ヨハネ黙示録のように長編の黙示録ではないけれども、小型の黙示録だという訳です。今日の箇所はその一部

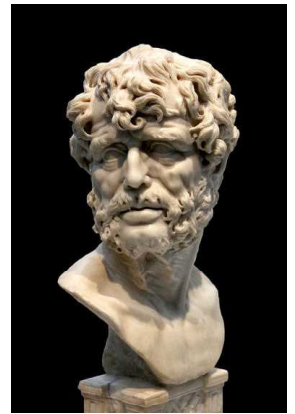
です。黙示録ですから、当然世の終わりのこと、終末が語られます。つまりマルコ福音書13章は世界の終末（終わり）について語る主イエスの「終末的説教」なのです。13章は「終末的説教」と呼ばれるほか、黙示録に出てくる表現や要素が数多く見られるので「**黙示的説教**」とも呼ばれます。ヨハネ福音書を除く、マタイ、マルコ、ルカによる福音書（つまり共観福音書）はすべてこの「黙示的説教」が「受難物語」の直前に配置されています。この配置の意図は、共観福音書の基礎となるマルコ福音書では、きわめて明瞭であります。そしてマタイもルカも基本的にその意図を引き継いでおります。すなわちこの配置は①**まず、この「黙示的説教」でやがて訪れる「世界の終わり」を描写しつつ、②次の14章以下に示される、もう一つ**



の終わり、「イエスの生涯の終わり」の描写、つまり「受難物語」の背景(遠景)を描いているのです。つまり、③二つの終わりが、ある種の緊張関係を持ちながら、物語の近景と背景(遠景)を形成します。「黙示的説教」は神が創造された世界の終わりという「決定的な時の到来」を告げ、それに続く受難物語は、イエス・キリストの生涯の終わりという「決定的な時の到来」を描きます。この二つの「終わり」は、二重写しにされていて(ダブルイメージで語られていて)、主イエスの受難の出来事に終末論的な光を投げかけているのです。〔※世界の終末に起る「審き」κρίσις とは、その言葉の動詞形 κρίνω が「分ける」という意味で、終末には神がすべての正邪を分け、白黒をおつけになることを意味しています。「受難の

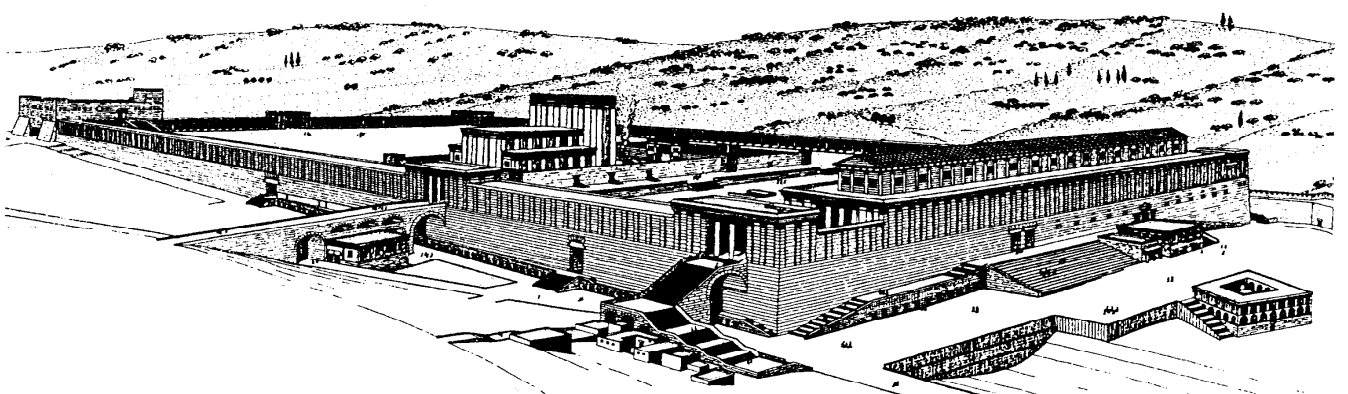
出来事に終末論的な光を投げかける」ということは受難のとらえ方で、わたしたちの救いに白黒がつくという含意をもっているのです。〕

新約時代の古代哲学〔例えばストア哲学〕では、宇宙や自然をマクロ・コスモス(大宇宙)と見、人間や社会をミクロ・コスモス(小宇宙)と見る見方が出てまいります。星やその他の天体が規則正しく運行し、季節の移り変わりにも秩序があります。このような宇宙や自然をマクロ・コスモス(大宇宙)と呼ぶのです。そしてマクロ・コスモス(大宇宙)の秩序にならうように人間や社会というミクロ・コスモス(小宇宙)も秩序あるも



セネカ(前1年頃-65年4月)

ヘロデ大王の神殿の丘



のでなければならない、となるのです。今このような古代哲学の表現を使うことを許して頂ければ、

「世界の終わり」というマクロ・コスモス（大宇宙）の動きと、一方の「イエスの生涯の終わり」というミクロ・コスモス（小宇宙）の「終わり」への動きが、まるで遠景と近景のように重なっているのです。ですから、主イエスの生涯それ自体が「世界の終末」を前提とした生き方、つまり終末（終わり）を意識した生き方の典型としても見る事ができるのです。

その生き方の重要な側面を本日の箇所は語っているのです。「何か壊れるとき」それは、わたしたちにとってあまり良いことのように思われませんが、聖書では必ずしもそうではありません。良いものがやって来るとき、必ず何か壊れるのです。主イエスの生涯が十字架で壊れるとき、救いが現実のものとなっていくのです。この世界は終末の破壊を通して、新天新地に生まれ変わるのです。わたしたちもまた、古いわたしたちを砕かれて新しくされていくのです。パウロはこのことを「古い人に死んで新しい人に生まれ変わ

る。肉の人に死んで霊の人に生まれ変わる」と言いました。

さて本日の箇所であるマルコ福音書13章1－4節は、イエスと弟子たちの一行が、神殿の境内を出て行くとき、エルサレム神殿の壮麗さに感嘆した弟子の一人の言葉から始まります。1節「先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。」それに対して主イエスがエルサレム神殿の崩壊を語ります。2節「これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない」と答えます。そして3節に進むと、主イエスと弟子たちは場所をオリーブ山に移動して、3節「イエスがオリーブ山で神殿の方を向いて座っておられると、ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかに尋ねた。」オリーブ山からエルサレムを見下ろしながら弟子たちが主イエスに尋ねたのは、4節



「そのことはいつ起こるのですか。また、そのことがすべて実現するときには、どんな徴があるのですか」という質問でした。この質問を受けて、5節以下に、主イエスが終末について預言をするという流れになっております。本日の箇所である1－4節は、5節以下の主イエスの「終末預言」の導入部分に当たるところなのです。

この導入部分は、今見ましたように二つの場面から成り立っています。最初の場面は、①「神殿境内から外へ」と向かっていく主イエスと弟子たちの移動の場面です。その移動の最中になされた主イエスと弟子たちの問答を描きます。第二の場面は、②オリーブ山からエルサレムを見下ろしながらなされる、主イエスと弟子たちの言葉のやりとりを描きます。

エルサレム神殿が主イエスと弟子たちの目の前にあります。この神殿は、紀元前20年にヘロデ大王によって完全改築に近い形で大拡張された神殿で、「ヘロデの神殿」とも呼ばれます。この美しい神殿を持つエルサレムは、当時の地中海世界でも有数の神殿都市の一つになります。その「神殿境内から

外へ」出て行くとき——今、見ましたように——弟子の一人が感嘆の声をもらします。「先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう」(v.1)。エルサレム神殿西壁（嘆きの壁）の発掘調査によって、ヘロデ時代に神殿改修のために使用された巨大な石が発見されています。それらの石の一つは、地表に露出した表面だけで長さ15メートル以上、幅2.5メートルの石で、地中の測定不能の深さが未確定ですが、その重量見積もりは420トンから600トンに達します。この石とその他無数の石には、特有の縁取りがなされており、弟子の一人がイエスの注目を喚起しようとした、当時の神殿の建物の壮大さと美しさを立証しています。主イエスの神殿破壊の預言は、弟子のこの賛嘆の言葉への応答として語られますが、しかし、このよ



うな頑丈な石造物と立派な建築物は、人の心に、確実に、永続性の感覚を吹き込み、人は、差し迫った破局を意識することはできなかったでしょう。

昔、学生時代の話ですが、夏休みが終わって新学期に授業に出席するために、駅からキャンパスに向って歩いている途中で、聖書学を習っていた指導教授に会ったんです。一緒にキャンパスの門をくぐったところで、おどろいたことに夏休み前までは、地面がむき出しであったキャンパスに、小さなブロックが敷き詰められていて、見違えるほど美しいキャンパスに様変わりしていたのです。驚いて「いやー、綺麗になりましたね」と申しますと、指導教授が「これがいつまでもこのままってことはないんだよね」と申します。(ここで聖書引用をもってくるとは)ちょっとキザだな、とは思いました



「エルサレム陥落」David Roberts (1850)

たが、理屈ではその通りです。「はあ」と答えました。完成品を見ると、その崩壊を考えることが難しくなります。

ガリラヤの田舎から出てきた弟子たちにとって、エルサレム神殿の壮麗さは、崩壊の「ほ」の字も感じさせないほどであったのかもしれない。「これらの大きな建物を見ているのか」と主イエスは切り出します。彼らの視線が、直接的な対象に支配されて、人間的な価値観から解放されていないのを知って、こう続けます。「一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。」弟子たちのすべての期待に反して、主イエスは神殿の完全な崩壊について語るのです。しかしこうして、建造物の壮麗さに対する弟子たちの直接的な反応が、破壊の預言によって相対化され、人間的価値観が粉碎されたところに、神の次元(神的次元)の介入が準備されるのです。

ここで主イエスが語っておられる神殿の崩壊は、主イエスが地上の生を終えられて約40年を経た、紀元70年のユダヤ戦争の際にローマ軍によってなされたエル

サレム神殿の破壊を指しています。そうすると主イエスは40年以上も前から神殿の崩壊を予言しておられたということになります。そんなことがあるはずはない、と考える人たちがいるのです。それでこれは「事後預言」だと言い出すわけです。つまり「事柄」が起こった「後」になって、実はこのことを、イエスはあらかじめ予言していたことだ、とマルコの時代の人たちが後から取って付けた、後付けだと言うわけです。しかしこういう言い方は、勉強しない人がよく言う言い方なのです。

神殿崩壊の予言は新約聖書に始まったわけではなく、旧約聖書から頻繁に出てきます(ミカ3:12, エレミヤ7:14, 26:6, エチオピア・エノク書90:28[BC. 2c])。ちなみに預言者エレミヤは主の神殿の門に立ち、主を礼拝するために神殿の門を入っていく「ユダの人々」に「お前たちの道と行いを正せ」と神の言葉を語りかけて、神殿の崩壊を予言します。エレミヤ書7章1－14節〔中略を含む〕。

7:1 主からエレミヤに臨んだ言葉。7:2 主の神殿の門に立ち、この言葉をもって呼びかけよ。そし

て、言え。「主を礼拝するために、神殿の門を入れて行くユダの人々よ、皆、主の言葉を聞け。7:3 イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。お前たちの道と行いを正せ。……7:4 主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではならない。7:5-6この所で、お前たちの道と行いを正し、お互いの間に正義を行い、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流さず、異教の神々に従うことなく、自ら災いを招いてはならない。…7:9 盗み、殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに香をたき、知ることのなかった異教の神々に従いながら、7:10 わたしの名によって呼ばれるこの神殿に来てわたしの前に立ち、『救われた』と言うのか。お前たちはあらゆる忌むべきことをしている



バビロンに連行されるユダヤの民

ではないか。7:11 わたしの名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巢窟と見えるのか。そのとおり。わたしにもそう見える、と主は言われる。…わたしが先に繰り返し語ったのに、その言葉に従わず、呼びかけたのに答えなかったから、7:14 わたしの名によって呼ばれ、お前たちが依り頼んでいるこの神殿に…わたしはシロにしたようにする〔つまり神殿を滅ぼす〕。

しかし神の語りかけにもかかわらず、「ユダの人々」はその「道と行いを正」すことをしなかったのです。その結果が、バビロン捕囚であり、エルサレム神殿の破壊であったのです。

バビロン捕囚以後も、ユダヤの民は、繰り返し宗教的な墮落に陥ったのでした。そのたびに、預言者たちは警告を発し、エルサレムとその神殿の運命について予言したのです。新約の時代と旧約の時代の間の「中間時代」と呼ばれる時代にも、神殿破壊の予言を記した文献が残っています（レビの遺訓16:4、ユダの遺訓23:3、シュビラの託宣 3:665など）。またラビ文献（特に重要なのは、ヨハナン

・ベン・ザッカイの預言。y.Solah 6.3; b.Yoma 39b, 'Abot R. Nat., [A] § 4〕。「ラビ」はユダヤ教師のこと）などにも同様の予言が見られます。

キリスト教に近いところでは、ヨセフスの書いた『ユダヤ戦記』という1世紀の歴史書に、来るべき神殿の破壊を予言した人物の記事が残されています。〔ヨセフス自身も、神殿の破壊を予見したと主張しています（『ユダヤ戦記』3.8.3, §§351-52; 『ユダヤ戦記』6.2.1, §109など）。〕ヨセフスが伝える



フラウィウス・ヨセフス

人物の名前はイエス。でもわたしたちの信じる主イエスとは別人です。

〔ユダヤ〕戦争が起こる4年前……、アナニアスの子イエスと呼ばれるどこにでもいる田舎者が……神殿の中に立つと、突然、大声でこう叫んだのである。「東からの声、西からの声、四方の風からの声！ エルサレムと聖所を罵倒する声だ！」そして彼は「エルサレムに災いあれ」と繰り返し…「この

都と民と神殿に災いあれ」……「そしてわたしにも、災いあれ」と口にした瞬間、投石機から発射された石が命中して即死した。こうして彼は、呪いの言葉を口にしながら死んだ（『ユダヤ戦記』VI.5.3 [§301、§306、§309]）。

さまざまな資料と照らし合わせてみた結果は、わたしたちの信じる主イエスが神殿崩壊を預言したということを否定し、この預言を「事後預言」として後付けされたものだとする根拠はないということです。

しかし大切なのは、そのような後付けか否かということではなくて、むしろ、主イエスによる神殿破壊の預言がここに置かれていることの意味なのです。この神殿崩壊の預言は、11章から始まる神殿境内でのサンヘドリンの重鎮、ファリサイ派、サドカイ派の人々や、律法学者、宗教指導者たちとの論争物語集（「第2論争物語集」）と13章をつないでいるのです。それは12章の終わりの二つの記事をみると明らかになります。つまり主イエスは12章38－40節で、律法学者の内実についてこう語ります。

12:38 イエスは教えの中でこう言われた。「律法学者に気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとして歩き回ることや、広場で挨拶されること、12:39 会堂では上席、宴会では上座に座ることを望み、12:40 また、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

律法学者の欺瞞を指摘し、彼らの強欲さに警告を与えた後に、もう一つの記事つまり貧しい「やもめの献金」の記事が続きます。12章41－44節。

12:41 イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。12:42 ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚〔約160円です〕、すなわち一クアドラン



スを入れた。12:43 イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言うておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。12:44 皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。

律法学者の欺瞞的な敬虔さに対する警告（12:38-40）と、寡婦の最後のレプトン2枚（12:41-44）と神殿の破壊の預言（13:1-2）の間の結びつきは明らかです。律法学者は、まもなく破壊されるであろう神殿体制の一部であり、それとは対照的な貧しい寡婦は神殿における真の礼拝者の姿を象徴します。イエスの神殿破壊の預言は、後ろ向きに〔後方を指示して〕、神殿にいる二種類の対照的な礼拝者を描いた律法学者と貧しい寡婦の二つの記事に、終末論的な重みを与え、それらが破壊が預言される根拠であることを提示しつつ、今度は、前向きに〔前方を指示して〕、神殿の破壊とさらに主イエスの受難〔ヨハネ福音書では主イエスの死と復活を「神殿の破壊と再建」に例えて語る。ヨハネ2:19

-21〕と、さらにはその破壊を超えた新たな次元の到来を示しているのです。

人間の確立した確かさ、それは神殿という、神に対する敬虔さを象徴する大建造物のような、大がかりな業績の上に築き上げた確かさであっても、偽りの確かさはすべて、崩壊を免れないものなのです。

さて次に第二の場面です。3節に移ると、場面が変わります。場所はオリーブ山です。主イエスの一行がたどったルートは、おそらく都の東の門を通過して、オリーブ山のふもとに続く道です。主イエスは、エルサレム入城（11:1-11）以来続いてきた神殿におけるユダヤ教の宗教指導者との一連の論争（「第二論争物語集」11:27-12:40）を先ほどの「律法学者への警告」（12:38-40）で締めくくり、神殿における真の敬虔の実例として「寡婦の献金」（12:41-44）に言及して、今、神殿を後にしました。群衆の歓呼に迎えられてエルサレムに入城したはずの平和の王は、ついには指導者層からは拒絶されて、いま神殿を退城していくのです。

この退城が決定的であるのは、その直後に「エルサレム神殿破壊の預言」(2節)が語られていることから明らかです。それは、エルサレムとの決別を意味しているのです。エルサレムに残されているのは、もはや審きの宣告のみなのです。主イエスの呪いの言葉によって「枯れたいちじくの木」(11:12-14/20-21)



の物語が象徴していたのは、まさにこの神殿体制の破壊であったのです。マルコはこの「枯れたいちじく」の物語を二つに割って、その間に「宮清め」(11:15-19)の物語を挟みこんで「サンドイッチ」にすることによって、神殿に対する審きの宣告を相乗的に確定し、強化したのです。

主イエスの一行は、神殿を後にして、都の東の門を通り、オリーブ山のふもとにから、神殿の丘の美しい建物群を見下ろすことのできる地点に上っていきました。オリーブ山は神殿の丘よりも高く、神殿に向かいあう位置にあり、主イエスが終末の出来事について語る(5-37節)のに適した場所なのです。さらに、ユダヤ教の伝統においては、オリーブ山で神殿に向かって座るということは宗教的に特別な意味をもっているのです(Strack-Billerbeck 1922: II 46)。すなわち、この箇所における主イエスは、ゼカリヤ書14章4節に見られる終末的な審判者が、主の日にオリーブ山に立つという絵画的な描写と二重にされているのです(Lightfoot 1950: 49)。

その日、主は御足をもって／エルサレムの東にある／オリーブ山の上に立たれる。



これによって、神殿崩壊をより大きな巨視的な視点、つまり超越的・終末的視点から見る目が与えられるのです。

マルコ福音書 13 章は、「小黙示録」と呼ばれることがあるように、大変動による混乱、切迫した審判、世界の終わりを告知します。主イエスによる神殿崩壊の預言は、その端緒です。現在残されている「嘆きの壁」の基底部分を形成している大きな石の塊は、弟子たちに賛嘆と畏怖の念を吐露させた、かつての壮大な建築の存在を示す目に見える証拠です。どんなに堅牢な建物や制度に見えても、それらはすべて転覆の可能性を持っているのです。

わたしたちの多くは、自分たちのしっかりと構築された世界が挑戦を受け、それが揺るがされることを望みません。自分の世界がしっかりと構築されていると確信するとき、むしろ、わたしたちは変化と変革を好みません。わたした



ちは、自分への信頼と〔自分がしっかりと立っているという〕自立

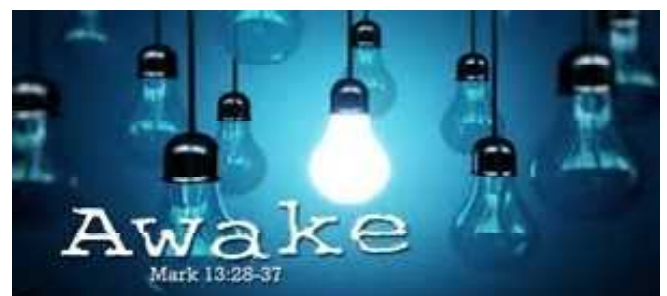
の神話のまわりに、自分の生き方を構築します。混乱と変革は、わたしたちが注意深く造り上げ、そこに安住している世界や構造を脅かします。それゆえ、神が現に存在されることと神がわたしたちを救ってくださること、つまり神の臨在とわたしたちの救いの必要性を、しっかりと見定めるときのみ、わたしたちは変化と変革を歓迎することができるのです。それは、わたしたちが過去を手放し、わたしたちの生命と生活および神の世界に現われる再生の(微弱な)しるしに場所を空けて準備する時にやって来るのです。わたしたちは信念ではなく、信仰によって生きる必要があるのです。信念は、なくさないようにしっかりと握りしめるものです。信仰とは、神への信頼を持って、可能性に対して、自己を開くことなのです。

主イエスは、外見的な事物の彼方にある現実を見えています。イエスの呪ったいちじくの木は(11:12-24)、古い生命の在り方(宗教生活)の死を示すと同時に、それはまさに信仰と祈りによって導かれる新しい生き方への再生を(予)示しているのです。アドベントは元

来「到来」を意味するラテン語の言葉(adventus)です。第一のアドベントは、主イエス・キリストの到来・誕生です。第二のアドベントは、主イエス・キリストの到来・再臨です。アドベントの派生語に〈アドベンチャー〉という言葉がありますが、二つのアドベントはいずれも、外見的な事物の彼方にある現実へのアドベンチャーへとわたしたちを誘うのです。インマヌエルの誕生と、人の子の再臨は、世界における神の臨在と救いのしるしです。混乱と苦しみと審きのただ中であって、神の聖なる臨在のイメージは、ニヒリズムや絶望と対極をなします。わたしたちの知る世界は終わりつつあります。しかし、神はこの混乱のただ中に臨在するのです。わたしたちは、古い世界の破滅における絶望から、すでに実現しつつある新しい世界の誕生の兆しへと導かれるのです。世界の混乱と困惑のただ中に、常にわたしたちと共におられる、その主イエスと共に、新しい一週間の歩みを踏み出したいと思います。祈りましょう。

2017.11.12 日本基督教団千歳丘教会

2019.5.12 日本基督教団千歳丘教会



13:1 イエスが神殿の境内を出て行かれるとき、弟子の一人が言った。「先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。」

13:2 イエスは言われた。「これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。」

13:3 イエスがオリーブ山で神殿の方を向いて座っておられると、ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかに尋ねた。

13:4 「おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、そのことがすべて実現するときには、どんな徴があるのですか。」

13・1 Καὶ ἐκπορευομένου αὐτοῦ ἐκ τοῦ ἱεροῦ λέγει αὐτῷ εἰς τῶν μαθητῶν αὐτοῦ, Διδάσκαλε, ἴδε ποταποὶ λίθοι καὶ ποταπαὶ οἰκοδομαί.

13・2 καὶ ὁ Ἰησοῦς εἰαυτῷ, Βλέπεις ταύτας τὰς μεγάλας οἰκοδομάς; οὐ μὴ ἀφεθῇ ὧδε λίθος ἐπὶ λίθον ὃς οὐ μὴ καταλυθῇ.

13・3 Καὶ καθημένου αὐτοῦ εἰς τὸ ὄρος τῶν Ἐλαιῶν κατέναντι τοῦ ἱεροῦ ἐπηρώτα αὐτὸν κατ' ἰδίαν Πέτρος καὶ Ἰάκωβος καὶ Ἰωάννης καὶ Ἀνδρέας,

13・4 Εἰπόν ἡμῖν πότε ταῦτα ἔσται καὶ τί τὸ σημεῖον ὅταν μέλλῃ ταῦτα συντελεῖσθαι πάντα;